

Vol. 32 No.4
2015.2.1

R E I M E I
黎明

鹿児島県歴史資料センター
黎明館だより

Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan

黎明館企画展

—生誕120年— 日本画家 瀬尾南海の世界

平成26年12月23日(火)～平成27年4月5日(日)



のどか
「 閑 」

119.8cm × 35.7cm

1950 (昭和25) 年

瀬尾南海(1894～1969)は、大阪府生まれ。薩摩藩士の祖父鶴汀に、幼い頃から絵を学び、9歳の時、内国勧業博覧会(大阪)で、祖父とともに作品が選ばれ、時の東宮(後の大正天皇)に絵を献上しました。

1908(明治41)年14歳の時、一家で上京すると、活躍していた絵師の狩野探溟(薩摩出身の樋口探月の門弟)の画塾で本格的に絵を学び、1918(大正7)年、文展(文部省美術展覧会)に入選し、将来を嘱望されるようになります。

師の探溟からは後継を強く望まれましたが、南海は、次第に画壇から離れていきます。そして、素人の希望者(財界人、実業家、大学教授、住職、菓子屋、主婦、会社員、学生など)に、絵の手ほどきを始めると、1940(昭和15)年に「素仙洞」(素人の仙人の集まり)という会ができるほどになりました。

また、南海は、絵を描くことの楽しさを、多くの方に味わってほしいという思いで、各地で絵を教え、晩年まで多忙でした。

南海の絵は、画題も技法も幅広く、各流派にわたるのが特徴で、75歳で亡くなるまで、多くの方々に絵を教えました。鹿児島では、ほとんど知られていません。

今回、南海の生誕120年を記念し、平成14年に御子息から寄贈された作品を中心に展示いたします。

「人生はすべて縁によって結ばれている」と語り、多くの塾生に慕われたという、南海の作品の世界をどうぞ御高覧ください。



せじいっそう
「 世事一掃 」

33.6cm × 61.5cm

1967 (昭和42) 年



瀬尾南海

鶴汀と南海

瀬尾鶴汀筆

「南洲先生真像」

27.2cm×35.2cm

1876（明治9）年



南海（本名：清一^{きよかず}）は、幼い頃から祖父鶴汀（本名覚左衛門）に多くを学びました。薩摩藩士であった鶴汀は、絵を描くことに優れ、島津斉彬の絵の相手を務め、西郷隆盛や桐野利秋にも絵の手ほどきをしたと伝えられています。この鶴汀という雅号の由来は、鹿児島城の別名である鶴丸城^{ちな}に因み、斉彬から拝領したものとされています。

「南洲先生真像」は、西郷に直接会い、描いたという点で稀少であり、貴重な資料であると思われます。残念なことに鶴汀の作品は、これ以外1945（昭和20）年5月25日の空襲によってすべて失われたと思われます。



1908（明治41）年 家族写真

写真右から

弟：清知

南海（清一）

※当時14歳

祖父：鶴汀

妹：清鶴

妹：清子

母：柔^{かす}

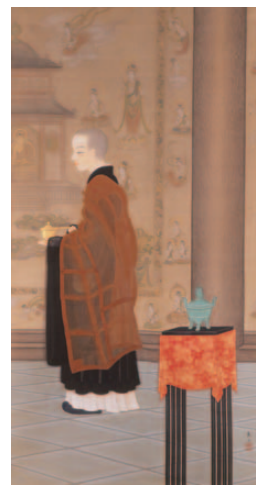
なお、南海は小学校に入学しましたが、教科書があまりに幼稚だといって、鶴汀が怒り、退学させられたため、鶴汀から四書五経、十八史略等の漢籍（漢文で書いた書籍）を学び、学校には通っていません。

鶴汀一家は、南海14歳の時に東京に移り住み、同時に、南海は、絵師の狩野探溟に線描を重視する狩野派の基本と、大和絵の彩色法を徹底的に学びます。しかし、20歳の時、祖父鶴汀が他界し、南海が、家族を支えることになります。

そんな状況の中、大正7年第12回文展にみごと入選を果たします。

第1章 人物を描く

中国故事や説話、禅画、日本の歴史、物語などに由来する人物を描いたものが多い。



けんこう
「献香」

文展入選

270.0cm×147.0cm

1918（大正7）年

たいこうぼう
「太公望」

素仙洞展出品

32.8cm×42.0cm

1955（昭和30）年



に が びやくどう おも
「二河白道を想う」

36.3cm×42.5cm 1966（昭和41）年

第2章 自然を描く

山や川、木などの風景や花、鳥などを描き、自然の生命力などを表現した。



「朝顔」
あさがお

27.2cm×24.2cm

1960（昭和35）年

「湖」
みずうみ
こうどしや
煌土社展

84.0cm×73.5cm

1955（昭和30）年



「紅梅」
こうばい

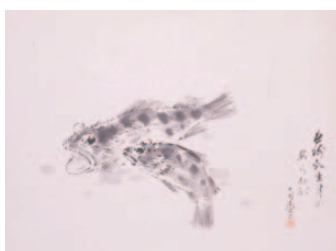
27.2cm×24.2cm

1966（昭和41）年



第3章 身近なものを描く

虫や魚、動物や置物、干支などを温かいまなざしで描いている。



「あらかず」

34.5cm×53.5cm

1946（昭和21）年



「奔馬」
ほんば

27.2cm×24.2cm

1966（昭和41）年

1903（明治36）年、大阪で開かれた第5回内国勸業博覧会で、会員93人に選ばれた時にも「奔馬」の絵であり、その後、明治天皇皇女の御前で揮毫した時も「馬」の絵を描き、「奉馬童」の号を贈られています。南海9歳の時のことです。



「ひつじ（丁未）」
ひのとつじ

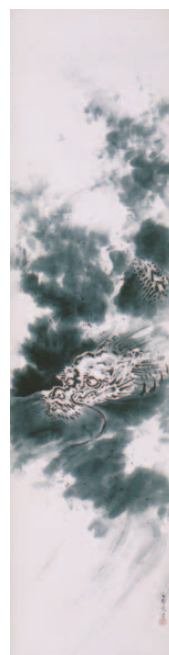
27.2cm×24.2cm

1967（昭和42）年

「雲龍」
うんりゅう

131.8cm×34.5cm

1964（昭和39）年



南海の作品は、空襲によって、戦前の作品の多くが失われてしまいます。しかし、昭和2年、静岡県蒲原を訪れた時の作品を、今回の展示では、お借りすることができました。また、南海直筆の葉書も御寄贈いただきました。

南海がよく口にしていたという多くの「御縁」を感じながら、皆様、ゆったりとした南海の世界をお楽しみください。

● 期間中一部展示替えを予定しています。

1期：12/23～1/25、2期：1/27～3/1、3期：3/3～4/5

【関連行事】

企画展会場での展示解説（入館料が必要）

① 日時：2月15日（日）14:00～15:00

② 日時：3月15日（日）14:00～15:00

場所：黎明館3階 企画展示室

講師：学芸専門員 切原勇人

常設展示のみどころ51

〈近現代のかごしま〉から

薩摩藩英国留学生関係資料

はじめに

今年は、19人の薩摩藩士たちが、藩の密命を受け、串木野郷羽島浦から英国に出航してから150年の節目となります。

いわゆる薩摩藩英国留学生は、15人の留学生と4人の使節や通訳で構成されていました。今回は、使節として大きな役割を果たした寺島宗則と五代友厚に関連する当館の常設展示資料を紹介します。

1 寺島宗則に関する展示



写真1「寺島宗則肖像写真」



写真2「勲一等旭日大綬章」

寺島宗則（松木弘安）は、天保3（1832）年、薩摩国出水郡脇本に、長野祐照の二男として生まれました。伯父で蘭方医の松木宗保の養子となり、長崎で8歳から蘭学を学びました。のち、江戸で蘭学の研究を深め、安政3（1856）年、幕府蕃書調所の教授手伝に抜擢され、翻訳に従事します。翌年、島津斉彬の侍医となり、オランダの書物を翻訳し、鹿児島でガス灯の点火や電信の実験を行うなど様々な事業に関わります。

島津斉彬の死後は再び江戸に行き、万延元（1860）年、蕃書調所教授を拝命、翌文久元（1861）年、幕府の遣欧使節団の随行員（医師兼通訳）に選ばれ、薩摩藩出身としては初めて、ヨーロッパに渡りました。写真1はその際に撮影されたものです。寺島は、ヨーロッパ各地を視察して、イギリスの国力に驚き、攘夷思想がいかに無謀かを実感し、帰国後には英語の習得に励みました。寺島が薩摩藩英国留学生に使節として選ばれたのは、この渡欧経験と語学力を買われてのことでした。

薩摩藩英国留学生の中では、外交使節の役割を担い、英国政府に対し、条約の批准権を幕府から朝廷に移すための交渉や、薩摩藩領内の港を開港し、通商を行うための交渉を行いました。

明治維新後は、外国事務掛や外務卿に任ぜられ、不平等条約改正に尽力し、明治9（1876）年、外務卿のときに、勲一等旭日大綬章を受章します（写真2）。また、在職中は電信の導入を積極的に推進するなど、日本の通信の近代化に貢献しました。

2 五代友厚に関する展示



写真3「五代友厚肖像写真」



写真4「英国からの五代書簡」

五代友厚は、天保6（1835）年、薩摩藩の儒学者五代秀堯の二男として鹿児島城下城ヶ谷に生まれました。安政4（1857）年、長崎の幕府海軍伝習所に入り、幕府や諸藩の学生とともに航海術を学びました。その後、文久2（1862）年、幕府の貿易使節船、千歳丸に便乗して上海に渡航し、藩費で汽船「天佑丸」を購入するなど、藩の貿易交渉に従事します。

薩英戦争では、寺島宗則とともに、藩船の避難に当たっていましたが、船が拿捕されたため、英艦の捕虜となりました。横浜で釈放されたのち、藩から英国との内通の嫌疑を受けたため、長崎に潜伏します。その際、英国商人グラバーのもとに出入りし、交流する中で、世界情勢に関する情報にふれ、貿易振興の重要性を認識します。そして、元治元（1864）年5月、薩摩藩当局に開国貿易・海外留学生派遣の必要性を説いた上申書を提出し、採用されました。

その後、藩の命令により、グラバー商会の援助を得て、イギリスまでの便船の確保や、イギリスでの生活面で必要となる様々な手配などを行いました。

写真3はイギリスで撮影したもので、写真4は五代がイギリスに到着したことを知らせる書簡です。イギリスでは、のちに鹿児島紡績所の設立につながる紡績機械の購入や紡績技師の鹿児島への派遣契約を結ぶなどの成果をあげ、帰国しました。

明治維新後は、参与兼外国事務掛に任ぜられ、大阪在勤となり、神戸事件などの外交事件を処理しました。

その後、下野し、実業家として半田銀山（福島県）など各地の鉱山を経営、明治11（1878）年には、大阪商法会議所を設立し、初代会頭となり大阪の商工業の近代化に努め、「大阪の恩人」と呼ばれました。

（学芸課 主事 町田剛士）

研究ノート

文久3年 葛城彦一日記について

はじめに

黎明館は、幕末の薩摩藩士、葛城彦一かつらぎひいちに関する資料約150点を所蔵し、また、数点の資料の寄託を受けています。その中に、葛城本人が書いた日記も含まれており、この時期の形勢などを考察できる重要な資料となっています。

1 尊王の志士 葛城彦一

葛城は、文政元（1818）年、加治木島津家の家臣の家に生まれ、国学を学び江戸に出て、当時国学の大家として有名であった平田篤胤ひらたあつたねに師事しました。帰郷の後、多くの学者や志士たちと交わり、尊王の志を厚くしていきます。

島津家の家督相続の内紛では、齊彬を推しましたが、嘉永2（1849）年の嘉永朋党事件（齊彬派の弾圧）に連坐しくろだなりひろそうになったために脱藩し、福岡藩主の黒田斉溥（島津重豪の十三男、齊彬の支持者）を頼ります。

文久3（1863）年に許されて帰藩し、加治木島津家出身で島津久光の養女として近衛家に嫁した貞姫付の付人として近衛家に仕えることとなりますが、藩の家老小松帯刀や側役大久保利通らから、九州諸藩や長州藩の視察などを命じられます。

2 日記から見える文久3年葛城の形勢視察

表題の日記は、文久3年の8月18日の政変後、島津久光が朝廷の命令を奉じて3度目の上京をするにあたり、久光上京に先んじて九州諸藩の形勢を視察し、報告する任務を帯びた際に書かれたものです。

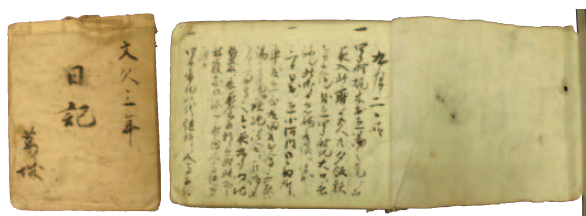


写真 文久3年 葛城彦一日記（黎明館蔵）

久光は、政変後の中央政局において自らが主導する、幕府、諸侯を含めた朝廷全体の改革を目指していました。そのためには、事前に諸侯と連携をとる必要があり、同じ九州の福岡、熊本などの諸藩の要人と接触し、形勢を探ること

は重要な任務であったと推察されます。その任務に葛城が任じられたのは、おそらくそれまでの経験や人脈などから、妥当な人事であったと言えそうです。

日記には、文久3年9月2日に加治木を出発し、4日には既に上京の途にあった小松帯刀、税所篤と熊本の八代にて面会した、とあります。また、同日と5日には、薩摩藩との連携を図るために南に向かっていたと思われる福岡藩の黒田山城、牧市内と会い、熊本藩の山形典次郎を訪問した、と記されています。

さらに、様々な人々と接触しながら小倉に向かい、10日に到着後、政変により、薩摩藩と対立状態になった長州藩の事情を聞き取りしています。

そして、12日に小倉を出立の後、18日に熊本の川尻にて久光に拝謁し報告、翌19日には再び命を受けて博多に向かった、と書かれています。

3 葛城の報告が久光上京に与えた影響

葛城の報告を受けた後、久光は長州藩の領域を避けた経路を進みます。川尻から阿蘇を横断して26日に豊後佐賀関から乗船、海路にて29日に兵庫に到着後、大坂を避けて伏見街道を通り、10月13日の朝に京都の二本松藩邸に入っています。

久光の上京経路は、出発前に既に決定していたことかもしれませんが、葛城の状況報告も何らかの参考になったと考えられます。また、今回の上京において、諸侯との強い連携を図りたい久光にとっては、葛城の情報が自らの政策を進めていく上での判断材料になったとも推察されます。

葛城の日記は、翌年の元治元（1864）年と慶応3（1867）年のものが残っています。当時の形勢を考察していく上で、これらの日記の更なる検討が必要であると思われます。

（学芸課 学芸専門員 市村哲二）

〔参考文献〕

- ・『加治木郷土誌』（加治木町、1966年）
- ・山内修一『薩藩維新秘史葛城彦一傳』（葛城彦一編輯所、1935年）
- ・『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』（鹿児島県、1993年）

※ 読み方が確定できない人物にはルビを付していません。

黎明館講演会

期日：平成26年7月6日（日）

演題：「鹿児島の仏像について」

講師：文化庁文化財部

美術学芸課主任文化財調査官

奥 健 夫 氏



鹿児島に、仏像が残っていないのは、廃仏毀釈によって失われたからであるが、中世文書などから多数のお寺や仏像が存在していた様子が窺え、明治維新に至るまでは、相当な数が残っていたのではと考えられる。そこで、廃仏毀釈以前の様子を窺いながら、鹿児島という土地の歴史や風土が、どのように仏像を生んで伝えていたかということを考えるのは非常に意義のあることだと思う。

まずは、黎明館保管の吹上の銅造菩薩立像。像高15.1センチという非常に小さいお像である。腹前に宝珠を捧げ持ち、直立する姿は、聖徳太子の時代に造られた法隆寺救世観音像や、百済の制作とみられる新潟県関山神社の菩薩像と同じだが、頭が大きくて優しいお顔で、低めの宝冠をつけているのは新しい要素といえる。このような特徴からみて、日本での制作とすれば、7世紀半ば以降ということになるが、半島製の可能性もある。半島に繋がる海に面した土地に伝来したことが興味深い。またこのような姿の金銅仏は、山岳信仰の地に伝来するものが多いが、吹上の像の伝わった場所から近い距離に山岳信仰の山、金峰山がある。

この吹上の菩薩像の後、鹿児島の彫刻史は非常に長い空白期を迎え、平安後期になり、ようやく作例が増えてくる。

まず、この時代の仏像として南洲寺の不動明王像がある。体自体をややひねりながら、左足を大きく出すという動きがあり、歩みながら振り返ろうとするようにみえる。これは、念仏往生を妨害する魔物を退散させ、臨終者を浄土に導くという、不動尊のはたらきを示している。それは10世紀になり、不動尊に求められた新しい役割といえる。南洲寺の像は、そうした特徴がよく表れていることから、不動立像としては早い時期、11世紀に造られたと考えたい。

次に、薩摩川内市長崎公民館の阿弥陀三尊像である。中尊は、^{ぶつしじょうちやう}仏師定朝が11世紀に造り上げた、優美な彫刻様式によって造られている。ただし、表現が繊細になっており、伏し目の内向的な表情を浮かべ、12世紀の前半～半ば頃の特徴をみせる。両脇侍^{きやうじ}の制作年代は、13世紀の半ば頃と思われる。中尊と異なり、強い眼差しで、衣のひだの彫り方にも、生き生きとした動きが感じられる。両脇侍に窺えるように、鎌倉時代には、この世に姿を表したほとけとしての、現実的な存在感を仏像に付与することが行われた。

そのことをよく示すのが、指宿市の光明禅寺の阿弥陀如来像である。側面観が分厚く、背中やお尻の肉付けにメリハリがあり、衣文が流麗で、細かい。そうした特徴から、作者は、運慶の父親の康慶の弟子であった定慶という人の系統の仏師だと思われる。像内に赤い色が塗ってあるのは珍しく、文字どおり血の通った存在としての仏を表している。また、通常のように足裏^{はぞ}に柄を設けて立たせるのではなく、足の後ろに差し込んだ鉄棒で立たせている。今は剥落するが、足裏に「千福^{せんぷく}輪相^{りんそう}」が表されていたのだろう。

最後に、黎明館の銅造阿弥陀如来立像と観音菩薩立像である。善光寺信仰によって作られた、善光寺式の阿弥陀三尊像の一つである。よく似た像として、東京国立博物館像（1254年）などがあり、同じ雌型^{めがた}から作ったのではないかとされている。ただそれらと比較すると、黎明館の像は、細部に違いが多く、形につじつまが合わない箇所もある。また一回り小さく、どうも「踏み返し」を重ね、かなり摩耗あるいは損傷した雌型に手を加えた上、鑄造した像であるらしい。鎌倉時代の末頃の作、と一応判断しておくが、将来的に、科学的調査を踏まえた検証が行われることを期待したい。

調査史料室だより

今年度刊行の県史料紹介

46年の歴史の重み

黎明館調査史料室は、前身の「県維新史料編纂所」を含めて、今年で創設46年目を迎えます。この間現在まで88冊に及ぶ『鹿児島県史料』を刊行してきました。内訳は黎明館のホームページを御覧ください。また、実際の刊本は県内各地の主要図書館等に配付しています。

以下、本年度刊行の『鹿児島県史料』（2冊）を御紹介します（詳細は調査史料室までお問い合わせください）。

『日記雑録拾遺 地誌備考二』

昨年度に引き続き、『地誌備考』を刊行します。収載する地域・史料等は以下のとおりです。

①「川辺郡下」（東京大学史料編纂所蔵）

^{かつめ}勝目郷（南九州市川辺町上山田・中山田・下山田）^{かみやまだ なかやまだ しもやまだ}南方郷（枕崎市、南さつま市坊津町）
七島（十島村） 硫黄島・竹島・黒島（三島村）

②「阿多郡」（東京大学史料編纂所蔵）

阿多郷（南さつま市金峰町浦之名・白川・中津野・新山・花瀬・宮崎）^{うらのみょう しらかわ}田布施郷（同池辺・大野・尾下・大坂・高橋）^{にいやま たぶせ}伊作郷（日置市吹上町今田・入来・小野・花熟里・田尻・中之里・中原・湯之浦・与倉・和田）^{いざく}

③「日置郡」（尚古集成館蔵）

^{ひおき}日置郷（日置市日吉町日置・山田）^{よしとし}吉利郷（同吉利）^{ながよし}永吉郷（日置市吹上町永吉） 伊集院郷（日置市伊集院町、同東市来町寺脇・南神之川・宮田・美山、同日吉町神之川、鹿児島市石谷町・入佐町・上谷口町・直木町・春山町・福山町・有屋田町・郡山岳町）^{いしだに いりさ かみたにぐち}市来郷（いちき串木野市大里・川上・湊町、日置市東市来町伊作田・神之川・長里・湯田・養母）^{いざくだ}串木野郷（いちき串木野市の旧串木野市地域）^{みなとまち}郡山郷（鹿児島市川田町・郡山町・西俣町・東俣町・油須木町）^{ゆすき}

④「日置郡 追録上」（東京大学史料編纂所蔵）

管轄沿革 市来郷古雑記 高岡河上氏系図文書 伊集院郷古雑記

質量の差はあるものの、該当地域に関する系図、支配関係記事文書類、社寺・名勝・旧跡関係記事文書類等により構成されています。

『名越時敏史料五 続常不止集』

^{なごやときとし さげんた}名越時敏（左源太）は文政2（1819）年、鹿児島城下出身の薩摩藩士で、「南島雑話」の主要な著者として知られている人物ですが、他にも多数の著作が残されています。

「^{ぞくとことわしゅう}続常不止集」は、その時敏の手になる弘化3（1846）年9月から同4（1847）年8月までの日記・記録類で、本年度はその前半部分（二之巻～三之巻之内八（一之巻は所在不明））を刊行します。

今回刊行する部分については、本人自筆と思われる部分を中心とする原本と、おそらく明治後期頃の書写と思われる写本の、2系統の史料が東京大学史料編纂所に所蔵されています。今回の刊行に当たっては、その両方の史料等を丁寧に見比べ、より正確な内容となるよう配慮しています。

前年度までの「常不止集」や「名越時敏日史」等と異なり、今回は日記部分は皆無で、彼の目に触れた法令等が中心です。そのため少々堅苦しい印象も受けますが、「^{れつちょうせいど}列朝制度」や「^{ようようしゅう}要用集」、^{おふれがきしゅうせい}「御触書集成」や「^{きゅうぎざつろく}日記雑録」等にも採録されていないものも数多くあり、その点でも貴重です。また、採録されているものの中にも、今回刊行のものの方がより適切である場合も見られます。

紙数の関係で一箇所だけ取り上げますが、宝暦治水で唯一薩摩藩士側の切腹説を裏付けるとされる史料（「腰の物にて怪我致し相果て候」という記述で有名な埋葬証文）に登場する永吉惣兵衛に関連すると思われるものがあります。これは惣兵衛が「遺言書」を残して「変死」した後の家督等相続願に関したもので（藩当局が親類に「願書物」を出せと指示）で、これまでほとんど知られていません。その前後の「変死」（「切腹」、「自害」を含む）者の家督等相続の手続き等に関するものからは、宝暦治水当時の状況も窺われます。

黎明館の催し物（平成27年2月～4月）

■黎明館企画展 3階企画展示室〔常設展示入館料〕

- ・「生誕120年 日本画家瀬尾南海の世界
—知られざる鹿児島ゆかりの画家—」
期間：12月23日(火)～4月5日(日)
- ・薩摩藩英国留学生渡航150年記念企画展
「幕末薩摩の留学生
—日本近代化の若き先駆者たち—」
期間：4月14日(火)～7月26日(日)

■黎明館講演会 2階講堂〔無料・申込不要〕

- ・「中世後期の武家と婚姻・養子関係—西国を素材に—」
講師：東京大学史料編纂所教授 久留島典子 氏
日時：2月14日(土) 13:30～15:00

■学芸講座 3階講座室〔無料・申込不要〕

- ・「島津久光と幕末の政局」
講師：学芸専門員 市村哲二
日時：2月7日(土) 13:30～15:00
- ・「もうひとりの御台所『茂姫』と隠居島津齊宣」
講師：学芸専門員 崎山健文
日時：3月14日(土) 13:30～15:00
- ・「幕末薩摩の留学生」(仮) (企画展解説講座)
講師：主事 町田剛士
日時：4月25日(土) 13:30～15:00

■古文書講座 3階講座室〔要資料代・申込制〕(予定)

日時：5月中旬以降毎土曜日13:30～15:30(連続6回)

■学習支援講座

〔常設展示団体入館料・申込制：定員20名〕

エンジョイ黎明館「歴史編(2, 4月), 文化編(3月)」

日時：毎月第2土曜日 10:00～11:30

黎明館 ある日 ある時

始良市加治木町日木山上(里)の田の神(模刻)

黎明館の城山側の民家前に並び、田の神像(模刻)を1体紹介します。

左手で帽子のように被った甑のシキを押さえ、右手にはメシゲを持っています。

照れ笑いにも見えてしまうポーズと満面の笑みを見ていると、不思議なことに、皆が笑顔になってしまいます。

原資料は、始良市の指定文化財で、明治時代の初めに地元の石工、名島嘉六によって作られたと伝えられており、今もなお人々の信仰の対象とされています。



■常設展示入館料

一般310円(230円) 高大生190円(120円)

小中生120円(60円)

※ ()内20名以上の団体料金

※ 県内の小・中学校、高等学校、特別支援学校の生徒とその引率者については、教育課程に基づく学習活動の場合は免除(事前申請が必要)

※ 身体障害者手帳、療育手帳及び精神障害者保健福祉手帳の提示があった方とその介護者1名は免除

休館日(平成27年2月～4月)

2/2. 9. 16. 23. 25 3/2. 9. 16. 23. 25. 30
4/6. 13. 20

期 間	黎明館以外各種団体主催の催し物	観覧料	お問い合わせ先(敬称略)
1/23(金)～2/1(日)	第16回 MBC 桜島美術展	有料	南日本放送事業部 099(254)7112
1/27(火)～2/1(日)	前畑省三展—女性を描く—	無料	前畑省三 099(265)1680
2/6(金)～2/8(日)	第67回 鹿児島県書道展 一般・高齢者の部	無料	鹿児島県書道会 099(225)2121
2/11(水)～2/15(日)	第53回 鹿光展・第6回 公募展	有料	東光会鹿児島支部(鹿光会) 0995(65)9315
2/11(水)～2/19(木)	第33回 鹿児島水彩展	無料	鹿児島県水彩協会 0996(63)0899
2/13(金)～2/15(日)	鹿児島国際大学学友会書道部展	無料	鹿児島国際大学学友会書道部 090(5745)5719
2/17(火)～2/22(日)	第17回 鹿児島和紙工芸展	有料	かごしま和紙工芸協会 099(293)7576
2/21(土)～2/22(日)	MBC学園文化祭	無料	MBC学園 099(225)0251
2/24(火)～3/1(日)	鹿児島大学教育学部美術専修卒業・修了制作展	無料	同担当者 090(5140)5065
2/24(火)～3/1(日)	タラデザインワールド	無料	タラデザイン専門学校 099(813)0033
3/4(水)～3/8(日)	鹿児島大学学友会書道部展・桜美展	無料	同担当者 090(9602)7115
3/6(金)～3/15(日)	第99回 二科展(鹿児島展)	有料	二科会鹿児島支部 099(262)4378
3/10(火)～3/15(日)	第13回 真多呂人形鹿児島支部作品展	無料	真多呂人形鹿児島支部 099(248)0300
3/17(火)～3/19(木)	鹿児島大学学友会美術部卒業展示会	無料	同担当者 080(1759)3274
3/21(土)～3/22(日)	かきぞめ作品展、支部長作品展	無料	同担当者 099(247)6452
3/26(木)～3/29(日)	大島紬職人展	無料	同担当者 099(243)7674
4/3(金)～4/12(日)	第43回 鹿児島陶芸展	有料	南日本新聞社事業部 099(813)5050
4/8(水)～4/12(日)	第20回 鹿鹿書展	無料	書道研究会鹿鹿 099(243)3145
4/15(火)～4/19(日)	日本風景写真協会鹿児島支部写真展	無料	同協会同支部 090(3986)9539
4/21(火)～4/26(日)	第16回 キヤノンフォトクラブ鹿児島写真展	無料	同担当者 090(5085)8507
4/28(火)～5/6(水)	第5回 鹿児島白日展	有料	白日会南九州支部 090(1873)4553
4/29(水)～5/6(水)	トリックアート in Kagoshima	有料	鹿児島テレビ放送 099(258)1111

※掲載内容は2月1日現在のものです。催し物の内容・日程等は、変更になる場合もございます。

黎明

Vol.32.No.4
(通算126号)

発行年月日 平成27年2月1日

編集・発行 鹿児島県歴史資料センター黎明館

所在地 〒892-0853 鹿児島市城山町7番2号

Tel(099)222-5100(代表) Fax(099)222-5143

ホームページアドレス <http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/>